

---

# 叶えぬ神に意味はなし

裏乱

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

叶えぬ神に意味はなし

### 【Nコード】

N0329X

### 【作者名】

裏乱

### 【あらすじ】

「かみさまってほんとうにいるのかな」  
恋に純朴すぎる少年が出会ったのが人々に忘れられた恋愛の神様だったら。

少年と神様に仕える少女の日常と成長を描く、  
どこにもあるようなどこにもない小さな恋の物語。

と、適当なあらすじもほどほどに、

もともとあらずじなんて存在しないほどに粗い筋書きなので、お恥しながらこれ以上書きようもございません。

なにぶん文章を書くのは初めてなもので、読者さまが退屈になって欠伸をしてしまう暇をも与えないほどに、うっすいうっすい内容になっっている気がしないでもありませんが。

稚拙な表現、簡素な文章、脈絡のないストーリーに誤字脱字、など突っ込みどころ満載とは思われますが、

そこは読者さまの寛大さにご容赦いただくとしまして、

この物語が、読んでくださる方のほんの暇つぶしの役割でも果たしてくれば、幸いといった所存です。

私も誠心誠意精一杯、少年少女らの青春を描写して参ろうと考えておりますので、

よろしければ、お付き合い下さいませ。

森羅万象。

意味、宇宙に存在する一切のもの。あらゆる事物・現象。

京志郎はこの四字熟語が好きだったりする。

表面的な意味だけを取れば、「万物」とか、もっと単純に、平易に言うなら「世界」とかとほぼ同義なのだろうが、この「森羅万象」にはそれらの言葉にはない壮大さと浪漫を感じる。

特に好きなのは「森羅」の部分だ。「シンラ」と言う鋭角でスタイリッシュな読み、そして、ミステリアスで神秘的な雰囲気を持つ漢字が織りなすハーモニーは京志郎の潜在的美意識を鷲掴みにして離さない。

こんなに美しい外見とは裏腹に、その意味が「無数に並び連なること」と、肩すかしのに平凡なのもまた彼を大変に魅了する。

無論、「万象」の部分も捨てがたい。「バンショウ」という読みは「シンラ」と肩を並べることにより、その荘厳さと古めかしいさが一層に増して「森羅」を際立たせる。

完璧だった。

京志郎には森羅万象と言う言葉はこの上ないほどに完成されているように見えた。

しかし、しかしだ。

いくら好きだからといっても、その言葉が書かれているもの全てを無差別的に好むかという答えは全くのNOで、ましてやそれが自分にとっては出来れば所持しておきたくないな、と思うものをなら尚更だ。

言うなればそれは、大好きな恋人の作る自分が大の苦手な料理のような、いやこの場合は、滅茶苦茶憎い相手を作った大好物、の方が合っているかもしれない。食べることには全く支障がないが何か釈

然としない、そんな感じだろうか。

「どーすっかなあ……」

この登校前の慌ただしい時に納得のいく答えが出るまで悠長に考えている暇はそんなに無いのだが、それでも、腑に落ちないまま決めてしまった結論に後悔するのが嫌な京志郎は、朝の貴重な時間を悩むことに彼は5分も費やしてしまっている。

登校の準備は済ませた。後はこれをどうするかだけなのだが。

悩ましげにそう考える京志郎の、その指に抓つかまれてぶらぶらしているものこそが彼を優柔不断たらしめる元凶、お守りとおぼしき小さな赤い巾着だった。

それは昨日までの連休の間、実家に帰ってきていた母が京志郎に託したもので、よく分からないが、母曰く、「すっごく御利益がある」らしく、はなみ放さず持つておくよう命じて渡されたものだった。

彼がいったい何に悩んでいるのかというと、この巾着を母の言葉通り常時身につけておくかどうかというところだった。

お守りなのだから付けていて損は無いはずなのにここまで決断に困っている理由、それはこの小さな巾着が、それはもう「かわいいお守り選手権」なんぞを開催した日にはぶっちぎりで優勝を飾りそうな程小さくて可愛くて、そのくせに、田舎の不良が「張羅しやらの白長ランの背にでかでかと入れる「夜露死苦」の文字のように、金の刺繡ししゅうで華々しく「森羅万象」と書かれていたからである。

そして何故お守りに「森羅万象」なのか。

何故なんのお願い事でもない「この世のものすべて」のと言う意味の四字熟語をお守りにしようとしたのか。皆目見当がつかない。

使いどころを間違えれば、いくら格好のいいことを言ってもバカにしか見えない。その典型であろう。

心情的には今すぐにも机の引き出しにこの巾着をしまつて、学校

へと急ぎたいのだが、

「…。」

いかんせん、母の助言に背いて失敗するのも怖い。

京志郎は中学の時に母に反抗したことで腕の骨を折ったことを思い出す。

京志郎の母は自称超能力者で、予知能力を駆使し、身内に降りかかる災いを助言によって未然に防いでいるらしい。

カオスだ。

ちよつと心の弱い子ならば非行に走ってしまうかもしれない。

だが、思い返せば彼女の助言によって助かったことも多いし、現にその言葉に従わなかったことで痛い目をみた経験もあり、なんだかんだで京志郎はその予知とやらの信憑性があるように思えていた。

自己の考えとしては、超能力よりも靈感の方ではないかと疑っているが。

（ま、小さいしそんなに目立たないだろう。もう迷ってる時間もねえしな）

自分の面子めんつよりも保身を優先することにしてそう言い聞かせ、せめて月嶋さんつきしまだけには見つかりませんよという願いを込めて、京志郎は小さな巾着を鞆にぶら下げた。

おそらく姉はまだ寝ているので小声で「いってきます」と言って家を出た。

そうして京志郎はまた、後悔することになる。

さて、自宅を後にした京志郎きょうしろうが学校へ向かうまでの道すがら、簡単な基本情報をチラツと公開しておこう。

彼が住んでいるのは、県境に位置する山の麓ふもとの小さな町だ。

決して「街」ではない、「町」だ。

「小さな」と言ってもそれは規模の話で、面積自体はそこそこ広い。緑が溢れ、空気もおいしく、のどかで住みやすい、実によい町である。

まあ言ってしまうえば田舎なのだが、少なくとも京志郎はそう思うようにしている。

北は山、南は海に囲まれており、地図の上方から下方へゆくにつれ、なだらかに等高線の指す値は低くなっていく。

海側の方が少しばかり栄えてはいるが都会と呼ぶには程遠い。

しかし、この辺の人達は海側を「都会側」と言ったりもする。

それは町の北側が余りにも開発されないまま本当にただの山の状態で放置されているからで、それに比べれば都会だなあ、と言った感じでそう呼ばれている。

京志郎の家は繁栄の南と未開の北の境目となる住宅地のちょうど真ん中辺りにあり、彼はこの家で姉と二人で暮らしている。

訳あって父は一緒に暮らしておらず、母も仕事の都合で今年から全国各地を回っているため家にはほとんどいない。が、二人とも健在である。

また、京志郎がこの春から通っているのは県立三守みつがみ高校で、京志郎の家からは、文字通り北上して徒歩で15分くらい。

偏差値レベルで言うならランクは中の上。勉学面よりもスポーツの盛んな学校で、とにかく敷地が広い。

グラウンドは野球部とサッカー部がフル活用しても余るほどでかく、中庭もなぜか3つあり、さらには青々とした木々が生い茂る裏庭もある。

というか、裏庭はもはや森といった感じで、遠目では裏の山とつながっているようにも見える。

京志郎はその1年7組に所属しており、まだ入学して一カ月と言うこともあるだろうが、見た感じではクラスの雰囲気は落ち着いていて、今のところは割と居心地のよいクラスであった。

少なくとも中学の時の様な波乱万丈な荒ぶる学園生活を送ることは無縁そうで、それだけでも京志郎の心を穏やかにするには十分だった。

あんな日々はもう沢山だ。

と、ここでチュートリアル的な説明文は終わりにする。

それは、くだららと通学路の微妙な山道を登校していた京志郎が目的地の教室へ辿りついたからである。

巾着にいらぬ時間を割いてしまった所為で平常より少し到着が遅れたが、まだ朝のホームルームには余裕がある。

京志郎は7組のドアを開け、入学時に指定されてから未だ変わらない自分の席に座る。

すると、その姿を見とめた一人の男が斜め後ろから京志郎の席へと近づいてきた。

「おはようさーん！シロー」

「おー」と、京志郎は振り返らずに右手を軽く上げ適当に挨拶をする。

声の主は判っている。

自分のことを「シロー」などと呼ぶのはこの学校にはそういないし、朝っぱらから感嘆符を付けて挨拶してくる奴となれば、浮かび上が



る顔は一つだ。

「おはようさん！シロー」

同じセリフを同じトーンで繰り返しながらその声の主、金髪・糸目の男は、まだ空席の京志郎の後の席に座る。

「遅かったやんけ？休み明けで寝坊するとは小学生みたいな奴やな」

「不当な罵りののしを受けたとして名誉毀損きせんで訴えるぞ。それに別に寝坊した訳じゃないし、ホームルームにも間に合った。無問題むつまつだいだ」

「それならまた何か悩んでたんやろ？どのネクタイを着けて行くのかなあ、とか」

「ネクタイはスベアと合わせて2本持つてるけど、どっちも一年の学年色の赤色で学校指定の同じもんだから迷う余地はねえな」

「うへへ。こうゆうやり取りも久しぶりやな」

この地方には珍しい方言を操り、独特な笑い方でさぞ嬉しそうに京志郎と喋っているのはクラスメイトの逢阪あいさか。

京志郎の悪友でもあり、平穩やひおを脅かす不安要素その1でもある。

「久しぶりって今年のゴールデンウィークたった4日だけだったぞ」

「んにゃ、4日でも十分久しぶいわ。こんな返しをしてくるんは俺の周りではシローだけやからな。会いたかったで、シロー」

「すごくいい顔で言う逢阪の目はキラキラと輝いている。(実際は目はほとんど開いてないのでこれは比喩)

「俺は会いたくなかったけどな」

「おやおや、登校早々おとくいのツンデレかいな」

「俺は生涯お前にデレた覚えは一度たりともないがな」

「そう言う逢阪は再び、うへへっ」と笑い

「このツンも久しぶりやと堪らんなあ…」

両手で頬を押さえ顔を赤らめている。

そんな様子に京志郎は言いようのない寒気を感じて思わず身震いをしてしまう。

(このノリも4日ぶりだとかかなり堪えるものがあるな。うん、じつ

にきしよくわるい)

ご覧の、いやお聞きの通り逢阪は関西地方の出だ。

中学1年の夏にこの町に越して来たらしく、京志郎とは2年でクラスメイトとなりその際知り合い、友達になった。

はずだったのだが何故かある時から京志郎のことを妙に気に入るようになって、以来ずっとこの調子なのだ。

といっても京志郎のことを恋愛対象として見ているとかではないので、そっち方面の展開は期待しないように願いたい。

「あ、そういえばこの休みに」  
ガラッ。

「おーい、ホームルーム始めっぞー」

これ以上きしよくのわるい悪友の顔を見たくないのです、話題を変え、母が託した巾着について話そうかと思ったところで1・7の担任、田中が教室に入ってきた。

ほら座れいー、と生徒たちに着席を促し、それに伴って、ほななあ  
と逢阪は自分の席に戻る。

逢阪は情報通で、七不思議のようなオカルトチックな話題は逢阪の最も好む話だったので母の不可思議な力について相談するにはベストな相手だと思ったのだが。

(タイミングが良いのか悪いのか分からないよ、田中先生)

放課後。

ホームルームが終わり、田中が教室を後にすると同時に室内は生徒たちの声でざわめき出す。

お守りのことがあったので何か起こるのではないのかとひやひやしていたが、幸いそれは杞憂きゆうだったようだ。

休み前と何ら変わらず穏やかに流れる日常に安堵し、京志郎きしろうは鞆たすきを肩に携えて帰途に着く。

高校では入学前から決めていた帰宅部に所属しているのでこれ以上ここにとどまる理由もない。

自宅で待っている怠惰な時間を過ごすため、席を立ちクラス後方の扉に手を掛けようとした瞬間、

ガラツ。「え？」

ドアが自動で開いた。

かと思うと、一人の女生徒が教室に入ってきて、

「おーい！いいんちよーうおわっ！」

7組の副委員長、通称「いいんちよ」を満面の笑みと朗々とした声で呼びながら扉のレール部に足を引っ掛けて、

「うわああああ！」

「だあああ！」

盛大にこけた。

目の前にいた京志郎を押し倒す形で。

「いたたた、ごめんなさあい……」

「ああだいじょう……」

自分の上に乗ったままの転倒者から漂ってくるのは鼻の奥の方を刺激する仄ほのかなシャンプーの匂い。

そして動きやすさと可愛らしさを兼ね備えた見覚えのあるシヨート

ボブヘアーにスカートの下の紺のスパッツ。

(これは確か…！)

「つ、月嶋つきしま!？」

きの部分で声が裏返ってしまった。

「あ、久遠くんとくん。ゴメンねえ、だいじょうぶ？」

倒れて来たのは隣の8組の女子、月嶋つきしま想依おもいだった。

京志郎が下敷きになったのでどこかを打った訳ではないと思うが、何故か頭の右側をさすっている。

想依はその少し舌足らずな声で心底心配そうに京志郎の安否を尋ねてくる。

「お、おう、大丈夫だ」京志郎は首を縦にブンブン。

「よかったあ、怪我でもさせちゃったらどうしようかと思ってハラハラしたよお。まったく、扉の前なんかにつたってたら誰かにぶつかられちゃうかもしれないよー？」

「お、おう、スマン」

「んもーそうじゃなくてツッコミいれてよお。オーサカくんにしてるみたいにな、なんでぶつかられた俺が怒られてるんだよ！ベイベ  
ー!」つてさあ」

目を吊りあがらせて右手でビシッと空を切る。

もちろん突っ込むところはそこではないし、想依のツッコミ自体もツッコミどころ満載だが、

「お、おう、スマン」

気が動転している京志郎は気のきいた言葉を返すことも儘ままならず返事は至って単調。

日々の鍛錬により絞りあげられた、しかし決して華奢はやしやというわけではなく出るところはそれなりに出ている想依のしなやかな肢体が、馬乗り状態で超至近距離にあるという事実現実を認識し卒倒してしまいそんな意識を保つだけで精一杯なのだ。

眼前にある想依の顔を直視できず無意識的に俯くと自然と自分の身

体と密着している想依の胸元が目に入って来て、慌てて目を逸らすと今度はうつかり想依の顔の方を向いてしまい、溢れ出す照れと純情からどこを見ていいのか分からなくなり、京志郎の黒眼は熱エネルギーを得た気体分子のように高速で動いている。

「ダメダメやな、シロー。こんなステキイベントが棚から転がり落ちて来たっちゆうのに」

(!!)

「あ、オーサカくん。おはよー」

気付けば逢阪が後ろで腕を組み、やれやれといった表情で立っていた。

「おはようさん、月嶋。って、オレの名前はアイサカやって言うてるやろ」

「えーいいじゃん？関西弁なんだし」

想依はえへへ、といたずらっ子のようににはにかみながら笑顔を見せる。すつごくかわいい。

「それ理由になってへんで。それよりそろそろ退いたってくれへんか？」

「へ？」

逢阪は失敗続きで副店長に叱咤されまくっている新人アルバイトを見る店長の様な目で、

「ウチの相方、そろそろ限界みたいやわ」

何かを訴えようとしているが声にならず、口をパクパクさせている京志郎を一瞥する。

「あああ！ごつめん、久遠くん！あたしそんなに重かった？」

逢阪が意図するところに気付き、想依はハッと飛び退く。

京志郎は「大丈夫だから心配するな」という思いと「全然重くなかったから気にするな」という気持ちを込め、首を左右にブンブン振る。

「そっかあ、よかったあ。じゃあまたねー」

そう言つて想依は笑顔で手を振り、いいんちよのもとへ駆けて行ってしまった。

「ぶあはっ！し、死ぬかと思った」

「だいじょぶかシロー？つて何で息まで止めとんねん」

ハアハアと息を荒立てて、足りない酸素を必死に補給する京志郎に逢阪は苦笑い。

「だつてよお、月嶋、すつげえいい匂いしたんだよ…」

「息荒立てながらのそのセリフ、めっちゃ変態みたいやで。ていうかお前、月嶋の前やとホンマに慌てん棒のシローさんやなあ。ダメダメやわ」

「う、るせえよ。んなことは重々承知してる。てか、誰が相方だ」

「月嶋想依、俺らと同じ九坂くさか中学校の出身、運動神経抜群で女子バレーボール部期待の1年生。誰に対しても裏表なく接し、その快活な性格から交友関係も広い。また、時たま常人では理解し得ない言動をし、他を混乱おとしに陥れる筋金入りの天然ボケ。だがそれもまた皆から気に入られる要因になっている模様。好きな食べ物は蓮根とバームクーヘン…つと。こんなところ」

逢阪は目を閉じ（もともとほとんど開いていないが）、化学教師が原子番号順に元素名を答えてゆくかのような流暢さですらすらと想依の基本プロフィールを暗唱してみせる。

「相変わらずの記憶力だな」

「これくらい出来な一流の情報家とは言い切れんからな」

逢阪は自慢げだ。京志郎も今更驚きはしないが感心する。

でも一女生徒のプロフィールを暗唱できるこいつの方がよっぽど変態じゃね？、とも思ったが口にはしない。

「しかしあいつのどこがええんか俺にはよー分からんわ。確かに元気で明るいし可愛らしいとは思っけど。なあ、どこに惚れたんや？」  
「だああー！声がでけえよ！クラスの皆に聞かれたらどうすんだよ

「!どう言い訳するんだよ!誰も信じちゃくれねえよ!」

「言ってること滅茶苦茶やで、シロー。それにな、こういうんは周りにそれとなく気付かせといて、応援やサポートしてもらった方が順調に事が運ぶもんやねんで?」

「確かにそうかも知れんが、」

二人が親睦を深められるような状況やキツカケを周囲に作ってもらえれば、それは奥手な京志郎にとっては大きな武器になるだろう。

「ヤなんだよ、そういうの」

しかし京志郎が求めているのはそんなことではない。

「あくまで人の力は借りんと?」

「ああ、それはずっと前に決めたことだ」

京志郎の望みは想依と恋人同士になることやキスをすることやその先のナニヤラなどでは断じてない。

ただ、想依ともっと仲良くしたい、会話がしたい、一緒の時を過ごしたい、それだけなのだ。

そんな恋とも覚束ないような淡い想いを、誰かに見られるのは耐え難いことだった。

「まあしゃーないか。そういう信念を持つところもシローのいいところでもあるしな」

京志郎の確固たる意志の籠こもった眼差しに逢阪は微笑を浮かべそう言った。

なんだかんだいって逢阪は自分のことをよく理解してくれている。

それが京志郎が逢阪とつるんでいる理由でもある。

(こんな奴でもよき理解者が近くにいてくれるってことは幸運なことなんだろうな)

「んなら、神様の力でも借りてみたらどうや?」

「へあ?」

黄金色の一週間が明け、今は5月上旬。

季節的にはまだまだ春だが、今日の様な太陽の恵みが燦々と降り注ぐ五月晴れには、放課後で日が傾きかけていると言えど野外で長時間動き続けるとなると流石に額にも汗がにじんでくる。

「はあ、はあ」

長い持久運動に息は上がり、足取りも重くなってくる。

しかし、ゴールはまだ見えない。

幾度か引き返そうかとも思ったが、それもまた骨の折れることだ。振り返ったところで出発点はとうに見えなくなっているだろうし、ここまで来るのに駆けた時間と労力を無意味なものにしたくない。進むしかない。

分かってはいる。しかし、しかし、

「はあはあ……。どこまで、続くん、だよっ、これはあああっ！！！！」  
思わず咆哮。

嵌められたことに気付くには少し遅すぎた。

『学校の北西にすごい恋愛成就の神社があるらしいねん』と囁き不敵な笑みを浮かべる悪友の悪どい顔がフラッシュバックする。

「あいさかのーボケえええー！！！」

再び咆哮、そして罵倒。

想依が倒れて来た後、混乱状態と放心状態の混在により正常な判断を下すことのできなかつた京志郎はまんまと逢阪の言葉を鵜呑みにしてしまい、気付けば寂れた石色の小さな鳥居くぐっていて、今は延々と続く長い長い灰色の階段のちょうど100段目辺りを登っているところだった。

「くそ、俺を実験台にしようって魂胆だな」

逢阪は『あるらしい』と言った。



それはその情報が確定された事実ではないこと、すなわち逢阪自身がまだ裏取りを完全には終えていないことを意味していた。

『らしい』がどの単語に係っているのか不明だが、今京志郎が上っている階段は学校から十時の方向に位置しているし、鳥居が建っていたことからこの先にあるのは神社で間違いないだろう。

だとすると定かでないは『すごい』と『恋愛成就』の部分ということになる。

『らしい』が『すごい』に係っていれば「どの程度の効力があるのか」がハッキリしていない。『恋愛成就』に係っていたならば「何の恩恵があるのか」が判らない。

どちらにしても曖昧な箇所を明瞭にするためには程度を計るための被験者が必要になる。

つまりそれが汗だけで天へと歩み続ける哀れな男。 久遠京志郎。

「何がよき理解者だ」

そうばやきながら落ちていた小石を坂の下へと蹴り飛ばす。

逢阪は京志郎を利用しこの神社の信憑性を計ろうとしていたのだ。

少しでも逢阪のことを親友だと思ったのが馬鹿だった。やはり悪友は悪友でしかなかった。

まるで希望の光が差したかのような顔をして逢阪の話を聞いていたさつきまでの自分に冷水でもぶっかけてやりたい。

「はあ……」

思わず溜息。離婚直後に結婚詐欺に遭ったような気分。

無論気は進まないが、歩を進めるよりほかないので、仕方なしにこの心臓破りの石段を制覇してやろうと決め、とうに重くなってきた足を引きずりながらしばらく登ると、やっと頂上が見えてきた。

ゴールには、石段のスタートに立っていたものよりも大きな鳥居がそびえている。

柱と柱を結ぶ注連縄しめなわもあり、下のものに比べれば幾分立派だが、それでもかなり寂さびれていると言わざる負えない。

最後の一段を登り切って一息つき、鳥居の真下に立って境内けいだいを見回す。

「へえ…、意外と立派なんだな」

なかなかの広さがある境内のほぼ中央に大きく荘厳そつこんな社が建っていた。

がしかし、手入れが行き届いていないのかかなり老朽化が進んでいて、境内も綺麗に掃除されているものの、石畳には所々にひび割れが生じている。

また、背の高い樹林の中にあるせいにか妙に薄暗く、風が吹くたびに木々がざあざあどざわめき立つ。

逢阪の情報に誤りがあるとは考えにくいが、

(…こわい)

こんな所に恋愛成就の神様が祭られているとは到底思えない。

言っでは失礼になるのかもしれないが、ぶっちゃけめっちゃ不気味だ。

灯笼なども無く、夜中にも訪れれば、山中にある墓地に匹敵するであろう絶好の肝試しスポットになること請け合いだ。

妖怪変化の類でもでやしないかと、若干以上の警戒心を持ちつつも恐る恐る参道を進む。

「狛犬みたいのも鈴すら無いのに賽銭箱だけは置いてるんだな…。

しかもしっかり磨かれて綺麗だし」

神社がいかにして生計を立てているのかは不明だが、お賽銭も重要な財源なのだろう。

手を掛けんとする気持ちもわかる。

一体幾人がこの直方体の木箱に銭を投げ入れているのかは知らないけれど。

「まあ、わざわざ貴重な体力と時間を費やしてこんなところまで登っ

て来たんだしな、ついでにお願い事でもしていくか。このまま何もしないで引き返したりしたら悲鳴を上げてまで俺をここまで連れてきてくれた俺の脚に申し訳ないからな」

誰に対してもなく自分発信自分宛ての独り言を言い訳のように呟き、財布から100円玉を取り出してずうずうしく口を開けて待っている木箱に放り投げた。そして、

(月嶋と仲良くなれますように月嶋と仲良くなれますように月嶋と仲良くなれますように月嶋と…)

ぎゅっと目を閉じ、想依のことを思い浮かべ目いっぱいお願いする。

「月嶋と仲良くなれますように月嶋と仲良くなれますように月嶋と仲良くなれますように月嶋と…」

思っていることが口から盛大に溢れだしてしまっているが、どうせ他に誰もいないのだ。

構うことはない。

すると、吹いていた西風が止んだ。

かと思うと再び強い風が前方から吹いてきた。

(え、前から？でも、前には…)

そんなはずはない。前方には社があるはずだ。自然現象の矛盾を感じて目を開けると、

「うっ!？」

青く、白く、眩い光が目飛び込んできた。

京志郎はとつさに手で瞼を覆う。

(な、何だ!?)

光は、目の前の賽銭箱のちょうど真上あたりから放射状に広がり、京志郎の網膜に突きささる。

(何だ、何だ何だ何だッ!)

突如目の前で発生した超常現象に軽くパニックに陥る。

光輝は、徐々に強くなり京志郎の体を包んでゆく。

足に力が入らなくなり、京志郎はその場に跪く。

(うそ、だろ…)

自分の生命力を圧倒的な力で押し伏せる様な強い、光。  
やがて、体全体に力が入らなくなり、視界は霞み、脳の回転速度は  
落ちてゆく。

どさっ。

(あいさか…、なぐる…、ぜってえ…)

京志郎は石畳の上に倒れ込み、じきに意識もブラックアウトして  
いった。

薄れていく意識の中で光中に人影のようなものを見たような気が  
した。

「はっ！」

目に飛び込んできたのは知っている天井だった。ここは、

「俺の部屋…か」

ベッドから体を起こし周りを見る。そこは紛れもない、京志郎の部屋だった。

「まさか…、夢…？夢なのか？」

……。

「支度するか…」

人間というものは自らの理解を超えた物事を無意識に忌避きひしようとするものだ。京志郎きょうしろうもそんな人の条理に従って現実逃避をしたものの、

「覚えてる…もんなあ、全部」

望むなら夢であってほしかったが、そう都合良くは行かない。

夢オチなんてのはリアルには存在しないのだ。現実の融通の利かなさに落胆しつつ、布団から出て登校準備に取り掛かる。

昨日、京志郎が意識を取り戻すと辺りはすでに薄暗く、ついでに言うと目を覚ました時いた場所は境内ではなく階段の入り口にある鳥居の辺りだった。

起きてからしばらくしても夢見心地で正常に働かない脳をと、やはり重たい脚を連れて、ほとんど帰巢本能だけを頼りに自宅に辿りつき、それから終始ぼーっとしながらも夕食を取り風呂に入り、すぐに床についたのだった。

（神社を訪れた参拝者とか、あるいは神社に仕える神主かみぬしとか巫女みことかに助けられて、その人の家で目覚めて、ついでに得体の知れない謎の力にも目覚めて、とかいう展開だよな普通…）  
普通？

いや普通ではないとしても、そういった成り行きもフィクションにおいてはあるふれたものだろうが、そこはやはり現実。そんな少年漫画のように分かりやすく事は運ばない。

ついさつき実感したところだ、つまりは間抜けな自分への嘲笑ちやうしやうを含めたほんの冗談。前半部は、まあ現実にも起こり得ないとも言い切れないが。

見ず知らずの高校生を拾ってくれるような善人を呼び寄せる力は自分には備わっていないのか、と洗面台で鏡越しの自分の寝起き顔を見つつ日頃の行いを改め直す気概きがいが湧き上がってくる。

……。

わけもない。

単純に昨日の神社での出来事を深く考えたくないだけだ。

ただの現実逃避。

(だって、訳分かんねえもん)

「まだこんな時間か。このままだとかかなり早く着くなあ」  
カッターシャツに袖を通しつつ現時刻を確認する。壁にぶら下がったアナログの掛け時計は短針をちょうど真下に向けている。昨夜はかなり早い時間にベッドでスリープモードに入っただけで自然と早起きになったのだろうか。

これでは学校で1時間以上の時を持て余してしまう。二度寝する程の時間は無いし、そもそもたっぷり取った睡眠のせいで全く眠くない。

(ん?)

どうしたものかと暇つぶしの手段をあれこれ考えつつ、鞆をゴソゴソして時間割を合わせていた京志郎が気付いて取り出したのは、数式やグラフなどが印刷された一枚の藁半紙わらはんし。これは、

「あつぶねえ、昨日出た数学の宿題だ。すっかり忘れてた」

数学担当の教師は授業態度の悪い者や課題の提出を怠る者には厳しく、また怒り方はかなり粘着質（逢阪情報）なため、叱責を受けるのは是非とも回避したい。早起きしたのは僥倖だったのかもしれない。

「よし、暇つぶしのあても見つかったし、さっさと用意して出発しますか」

ゆっくり目に登校準備をして常時より30分ほど早く家を出た。

晴天、とは言えないが、曇天、とも言い切れない微妙な天気の下、通学路には、中途半端に早い時間のため一般生徒はもちろん、朝練に向かう生徒もいない。

腿に横たわる筋肉痛が歩く邪魔をするが、普段は味わうことのできない静けさの中、早起きするのも悪くないなどと考えながらまだ生活指導の職員もいない校門をくぐって教室へと向かう。

「へ？」

つもりだったが、京志郎は昇降口でひたと足を止めた。

腰まである長い黒髪のストレートヘアに切りそろえられた前髪。やたらと端整な横顔に透き通った雪のように白い肌。

綺麗すぎる二重瞼のキラキラと輝く大きな目。

昇降口に一人の女生徒が立っていた。

（こんな時間に他の生徒がいるとは）

京志郎が上げた間抜けな声にバツと振り向き、京志郎の姿を見てその女生徒の目は見開らかれていく。

彼女は左手で下駄箱のふたを開け、右手には紙切れの様なもの握った体勢のまま固まった。

制服の胸のあたりに結ばれたりボンは赤色なので、同じ1年生だろう。

黒髪の女の子は京志郎をじっと見つめ微動だにしない。

対する京志郎もなんとなく目を逸らせずに、気まずい空気の中2人

は見つめあつたままだ。というか、目力がものすごい。

「あの、」

びくっ！

ばたん。

耐えきれずに京志郎が口を開くと、その女の子は驚いたように少しのけ反り、解放された下駄箱のふたが物理法則に従い音を立てて閉まる。

少々戸惑ったが、京志郎は意中の疑問を尋ねてみる。

「ええと…、俺の上履きに何か用かな？」

何故、この娘はこんな早い時間に登校してき、見ず知らずの自分の下駄箱を開けていたのか。

「…。」

女生徒の堅く口は閉じられたまま、目だけは下を向いたままきよるきよると挙動不審に動いている。

混乱してどうしていいか分からない、そんな表情で彼女は舌唇を軽く噛んで、両手は胸元のあたりでをキュツと握られている。

（聞き方がまづかったか？）

見知らぬ女生徒が自分の下駄箱を無断で開けているところに偶然遭遇してしまった時の、最良の反応とはどんなものだろうか？

京志郎は何も怒っている訳ではなかったが、不審感から少し口調がきつくなってしまうたかも知れない。少し反省、真摯な態度で再び訊ね直す。

「えーと、きみうわっ！」

突然、俯いていた少女が顔を上げ、キツと覚悟を決めたような目をしたかと思うと、口を開いた京志郎をガン無視でいきなり走り出し、校舎を飛び出して校舎裏の方へと駆けて行った。

「えーなんだよそれ…」



一瞬怯む<sup>ひる</sup>。が、  
「逃げるってことは、やましいところがあるって事だよな！」  
追うか追わないかで迷う前に、すでに脚は走り出し少女の後を追っ  
ていた。

そして京志郎の頭からは最早白紙のままの数学の宿題の存在などと  
うに消え去っていた。

「はあ、はあ」

「はあはあ…、へへっ、やっつと、追い、詰めたぜ…」

悪党なセリフを吐き、京志郎は思わず口角を上げてニヤリとする。

しかし、表情とは裏腹、体力の方はすでにエンプティ。

脚は立っているのがやっつとで、さっきからふくらはぎのピクピクが止まらず、左右を同時に攣くわってしまっそうだ。

動悸も当分治まりそうにない。

黒髪少女の走力は京志郎きょうしろうの予想の遙はるか天上てんじょうをいつていた。

脚の速さには少しばかりの自信を持っていた京志郎だったが、彼女はそんなちっぽけな矜持きょうぢなど打ち砕かんとするような快走くわいすうっぷりでサクツと捕まえてサラツと事情を聞き、すぐに踵かかとを返す予定が、彼是10分近く少女と校舎裏で追いかけてこをする羽目はめになったのだ。

（いや、筋肉痛じゃなかったら捕まえられてたって！いやマジで）ちっぽけな矜持は健在けんざいしていたようだ。

しかし、相手が女の子だと思って油断していたこと（これについては深く反省）を考慮しても、10分ものあいだ全速力で走るなんて男でもなかなか出来る芸当げんたうじゃない。

（いったいこの娘こ、何もんなんだ）

「はあ、はあ」

見ると黒髪の少女もさすがに疲れたのか、校舎の外壁に背中を預けて苦しそうに息をあげている。

走りすぎでか目にはうつすらと涙が浮かんでいるようだ。

が、瞳はそんな疲労など感じさせないほど凜りんとしており、執拗しつように自分を追いかけて来た男を睨にらみつけていた。

（って、これじゃまるで俺が悪者みたいじゃねえか！）

この場だけを見れば誰だつてそう感じるだろう。女の子をしつこく追い回し、あげく追い詰めてにやけながら「はあはあ」言っているのだ。もう変態にしか見えない。

（くそつ、やっと捕まえられた嬉しさで顔がにやけてしまった！というか捕まえてどうするんだ？）

今更ながら冷静になり自問自答。

ほとばしる正義感に突き動かされてとりあえず条件反射的に追つて来てしまったが、捕まえた後のことを考えるのを忘れていた。

（大体彼女が何をしていたのかも不明瞭なのに、逃げたつて理由で追いかけてまわしたのはやつぱりまずかったか…。もしかしたら俺の上履きがその辺に転がってたから下駄箱にしまつてくれてただけなのかもしれないに…）

彼女が本当に善行を行っていただけだとしたら、自分は本物のサイテー野郎だ…と、汗で頭がいい具合に冷えてきたところで、勢い任せの行動を取ってしまったことに深く後悔する。

落胆する哀れな京志郎をよそに、黒髪少女は憤怒おどろの形相だ。

彼女は逃げ出したいようだが、疲れて脚が言うことを聞かないのだから、相変わらず息を切らしながら京志郎をキツッと睨ねめ付けたまま動かない。

（とりあえず追っかけ回したことを謝つて、それから何をしていたのか聞こう。うん、そうしよう）

「あのー…ごめんな、追い回したりして。悪気は無いんだ。つい、つて言うか、条件反射でさ。…それで、君はいつたいな」

「この罰当たり童め」

「…!？」

弁解と和解の希望をのせた京志郎の発言を、もはや現代人が日常会話では使うことのないと思われる単語を含めた言葉で遮ったかと思つて、

「覚えておれっ…!」

ドサッ。

「え?」

黒髪女が倒れた。うつ伏せで。

…。

(ぶ、武士だー!)

黒髪女は定番すぎる捨て台詞を吐いてその場に崩れ落ちてしまった。その姿はまさに、武士。

倒幕の夢半ばに幕府軍の手によって地に伏した攘夷志士を思わせる、見事な散り様。

その姿はまさに、武士。

「って、アホなこと考えてる場合じゃねえ!おい、大丈夫か!」

京志郎は慌てて黒髪女に駆け寄り仰向けにして呼ぶ。しかし少女は目を閉じたまま返事をしない。

「お、おい…もしも…?」ゆさゆさ。

肩を軽く揺すってみるがやはり反応はない。

意識を失っているようだ。

「ほつとく訳には、いかねえよなあやつぱ…」

細かい経緯や理由はどうあれ、彼女をこんな目にあわせてしまったのは自分だし、責任と償いをもって少女を保健室まで連れていくことにする。

京志郎の方も疲労はかなりのものだったので、黒髪少女の重量に身体が耐えられるかは心配だったが、そつと抱き上げると彼女は異様に軽かった。

「羽根のような」という表現を生身の人間に適応させても違和感がない感じたのは初めてだ。

抱き上げた肢体はさっきのまでの風を切って校舎裏を疾走する姿からは想像しがたいほど、華奢だ。

黒髪女の体を左腕は背中、右腕は裏腿うしろもものあたりを支点しつていに持ち上げると、すらっと伸びてた細く長い両脚が陽ひの光を浴びて白く輝きやたらと目につく。

そして、間近で見ると少女は顔立ちが本当に整っているのがより一層わかる。

端的たんてきな言葉で表せば、美人。それも絶世の。

十人いたら十二、三人は振り返りそうな、現世うつしよの外にすら伝わっても不思議ではない程の美しい眉目まゆめく。

肌も白く透き通っていて、目を伏せ眠る姿はさながら白雪姫。

その儂はかなげな寝顔はとても絵になっていて、京志郎は目を奪われじつと見入ってしまう。

想依おもよに想いを馳はせていなければ危うく一目惚れしていたやもしれない。

「……」

そして少女の美しさを実感する程に、彼女が何をしようとしていたのかが一層知りたくなる。

単なる好奇心とも、真実への探究心ともまた違う何かが、京志郎の心に引っかかりを作っていた。

携帯で時間を確認する。と、同時に予鈴が鳴った。

「やば、ホームルーム始まっちゃう！」

湧き上がる疑問は一旦脇わきに置いて、少女を抱えて保健室へと急いだ。

余談。保健室の先生に言われて気がついたが、京志郎は彼女をお姫様だっこしていたらしい。

「どうやった？」

昼休み。

いつものように連れ立って食堂へ向かう道すがら、逢阪あしさがが思い出したように京志郎きょうしろうに尋ねる。

「どうって、何がだ？」

「何がって、神社や。神社」

「じんじゃ…って、あつテメエ！昨日はよくも嵌はめてくれやがったな！」

思わず横でヘラヘラしている関西弁の胸ぐらを掴む。

朝から色々あったせいで昨日の徒労のことなどすっかり忘れていた。

「いやいや、嵌めたつもりはないで。俺は『行ってみたらどうや』って勧めただけやし。まあ、利用しようとは思ったけど」

「一緒だろうがっ！何なんだよあのめちやくちや長い階段は！登るのめちやくちやしんどかつたんだぞ」

「まあまあそう怒りなつて。俺にはあの階段を登りきれぬ自信がなかつてんつて。その点シローは中学ん時に鍛えつとたし適任やろ？」

「はあ？」

「それに、あの神社はホンマもんの恋愛成就の神社やし、シローには折角の恋を成就させてほしい。せやから、お前に頼むんが一番適当やつてん」

急に真剣な顔になって弁明を垂れる逢阪。この表情も言葉巧み弁明も情報家稼業で培った演技と口八丁くちばちぢょうにすぎない、ということ判っている。判っているが、

「俺はあんな石段を登るために毎日走り込みをしてたわけじゃないけどな」

そう言つて京志郎は掴んだ手を離す。全然腑に落ちないが過ぎたことをとやかく言つても仕方がない。

「まあまあ、世の中ギブアンドテイクやつて！」

「こんな一方的な持ちつ持たれつの関係見た事ねえよ」

そう呟きながら吐く溜息には諦めの色。これからもあれこれ揉めながらも、結局はこの悪友の<sup>アホ</sup>ことを憎めないまま付き合つていくんだな、と京志郎は実感する。

「あだつ！何で殴んねん！」

逢阪の頭頂部を京志郎の拳が軽く小突く。

「いや、やつぱ一発くらい殴つとかないといけないような気がして」

「なんやそれー…。まあええわ。で、実際のとこどうやったんや、

神社。ご利益ありそうか？」

「ご、ご利益！？」

「そや。お願いしたんやろ？」月嶋<sup>つきしま</sup>さんとお付き合いができますよ

うにー』つて」

「だあー！声がでけえつつつてんだらうがー！」

「わかつたわかつた。んで、どうなんや？効果のほどは」

「え、ああ、ご利益っていうか…」

昨夕の事を思い返す。

…。

「祟り？」<sup>たた</sup>

「は？」

「あついや、何でもない」

(い、言えるわけねー！お願い事してたらなんか知らん間に気失つてて、気が付いたら境内<sup>けいだい</sup>にいたはずが何故か階段下の鳥居のところ<sup>けいだい</sup>でぶっ倒れてて、しかも辺りは真っ暗で、夢見心地で家まで帰ってきました。なんて意味不明な上に格好悪くて言えねー！)

説明くさい回想が脳内をよぎる中、

「ご利益は…まだ感じねえな。そんなすぐに効果が出るもんでもないだろ」  
なんとか誤魔化す。

逢阪はさよかー、と残念そうにぼやきつつ、どこから取り出したのか、「？」と書かれた手帳に「一日目効果なし」とカリカリ書き込む。

「俺は夏休みのアサガオかよ…」

と、食堂の扉を開けながら呆れ顔で呟く京志郎の脳裏に浮かぶ昨日の怪奇現象、あの青い光。

そしてその光の中の青い人影。

「んな買ってくるから、席確保しといてー」

そう言つて逢阪が券売機の最後尾へと向かい、京志郎は適当に座席を見繕つて3人掛けの丸テーブルに腰かける。

倒れる前後の記憶は曖昧なのに、あの眩い光だけはどうにも頭の奥に張り付いて離れない。

基本的に自分の見た物しか信用しない性質の京志郎だが、母のことも実体験しなければ信じてなどいなかっただろう。昨日のことで自分の目すら疑わざるを得ないような気持ちだ。

（なんだってんだ。どうかしちまったのか俺は）

あの光輝について何か理に適った説明をつけたいところだが、いくら考えても答えなど出はししない。

しかし、昨日のことはそれほど気にかける必要性はない気がする。

（もうあの神社に訪れることはないだろうしな）

京志郎が忘れてしまえばあの光のことは誰の海馬にも刻まれない。

あの光や神社には、折角手に入った平穩を打ち砕く可能性があるように思える。

直感だった。根拠はない。



ならばいつそなかつたことにしてしまおう、というのだ。  
ご都合主義。気には食わないが。

「おい、何だこりゃ」

「昼飯や」

「違う。いや違わないが、そうじゃなくてこいつは何だつて聞いてんだ」

「パンや」

「違う！いや違わないが！そうじゃなくて何でトンカツのお供がこいつなんだよつて聞いてんだよ！」

京志郎は皿の上に乗っている、それを指差しながら、自分の盆上に内在する違和感の正体に言及する。

一方逢阪は自分の盆の上に乗った、それをムシヤムシヤ食べている。

「おまかせメニューやからなあ」

「おまかせすぎるだろ！ちよつとはバランスとか考えるやー！」

京志郎と逢阪が食堂で注文した「今日のおまかせ定食（¥340）」

、そのおまかせの内容はというと、

「何でトンカツと切干大根と味噌汁にフレンチトーストが付いてくんだよー！しかもご飯が無いってなんなんだー！もうちよつと定食つて概念に囚われるやー！」

「大声出しなや恥ずかしい。いつものことやろ、バランスがめっちゃくちやなんは」

格安で量もそこそこある「今日のおまかせ定食（¥340）」は、学食の中ではかなりのお得メニューなのだが、何分おまかせ度が高いために常識を逸脱した組み合わせで提供されることがしばしばあり、学食をよく利用する者にとっては安さに釣られて注文してはいけないメニューとして、あんもく暗黙の了解が持たれている。

「大体余った食材や低価格で大量購入した食材を処理するために開発されたメニユーに期待なんかするほうがアカンねんって。とりあえず安くで腹は膨れるんやし、良しとしようや」

「お前のそのプロ根性みたいなものには感心するけど、なんで俺まで付き合わせられなきゃならないんだ」

逢阪は情報家稼業の一環として新聞部に仮所属している。

月一で発行されている学生新聞の執筆にも携わっていて、その新聞のミニコーナー「今月のオマカセ定食」に掲載する情報を収集すべく、毎日この悪魔じみたチヨイスを繰り出してくる定食を食べているのだという。

「内容にバラつきがあった時に自分のだけやったら判らんやろ？ 十分な情報ほど役に立たんもんはないからな」

「他のこれ食ってる生徒に取材すればいいだろうが」

「んな物好き他におらんって。お、このカツ、パンに挟んだら結構いけるんちゃう？」

「…一生やってる」

「えーさすがにそれは合わないんじゃないー？」

「いや、さすがにも何も明らかにミスマッチだろうって、」

（この微妙に鼻にかかった癒し声は…！）

「っ、っ、っ」

唐突。 神出鬼没。

まるで気配を察知させずに京志郎の背後を取ったのは、

「月嶋！」

月嶋想依が現れた。

突然横から会話に加わって来た声に振り向くと、想依が食堂のトレイを持って立っていた。

「あ、こんにちはあ久遠くん。オーサカくんも」

「おー月嶋、食堂で会うなんて珍しいやんけ。どないしたんや？」

確かに珍しい。実際、想依と学食で鉢はち合わせるなんて初めてで、予想だにしない出来事に、京志郎は早くも緊張状態に入る。

「あー今日お弁当持ってくるの忘れちゃって。お昼休み始まってから気付いたからもう購買も変なパンしか無くてさあ」

「確かにアレは食べたもんちやうからなあ」

苦虫にがむしを噛んだような表情で想依に同意する逢阪。それにしても、想依も相変わらず抜け目なく抜けている。

「それです、一緒に食べる人もいないし、どうしよっかなーってえへへ、と少々照れ臭そうに苦笑。

意図の汲くみ取りやすい想依の発言に、逢阪の開いてないはずの眼がギラッ、っと閃光せんこうを放ったような気がして、俯うつむいている京志郎は背筋に言いようのない寒気を感じる。

「んなら一緒に食べようや！な！ちようど席も一つ空いてるし」

「え、いいの？よかった」

逢阪の助け舟に心底ホツとした様子で、安堵あんどを見せる。

「こんな大勢の人の中で一人ポツンとランチするのもなんかねえ、って思ってたさあ」

喜々とそう言って想依が空席に腰を下ろす。

と、途端とたんに逢阪はフレンチトーストでサンドされたカツを一気に頬張って口の中に押し込み、

「ほれだあほれはふだいがあうんで、ほれでひふれい」

自分の盆を持って席を立ち、京志郎に「ごりあふあっはんはうは？」とだけ耳打ちしてそそくさとどこかへ行ってしまった。

…。

（はああああ！！！？）

「行っちゃたね…」

逢阪の走って行った方を見て、目を点にしている想依と、驚きと動揺ようからこれ以上ないくらいに目を見開く京志郎。

「…！」

（『取材があるんでこれで失礼』だと！？うそつけよ！『夜に備えてシエスタせねば』とか言っていていつも飯の後は昼寝してただろうがっ！ふざけんな！

てかなんだよ去り際に言った『ごりあふあっはんはうは？』って！…『ご利益あつたんちやうか？』ってか？うるせえよ！こんな状況でご利益かききれねえよ！持て余すよ！）

「どうしたの久遠くん？ぼーっとして」

「えっ、ああなんでも…ない」

「どうしたんだろ、オーサカくん」

「さ、さあ？取材って言うてたけど」

「そっかあ。大変だねオーサカくんも。じゃあいっしょ食べますかあ。久遠くんもトンカツとフレンチー？」

「お、おう、オススメ定食…」

「いやいや、そこは『フレンチってなんだよ！ミーはフランス人かっ！』って突っ込むところだってー」

「お、おう、俺はフランス人かっ…」

「ていうか久遠くん食べないのー？カツ。ずっと俯いて…もしかして具合悪いとかあ？なんか耳赤いし…風邪かなー？」

「い、いや、至って健康…」

「そっかー。じゃあ、何だ？減量中とか？ご飯はいっぱい食べた方がいいよ？おっきくなれるし！」

「お、おう、いっぱい食べる…」

無意識でカツをフレンチトーストに挟む京志郎。

混乱状態に入ったようだ。しかし、

（てか、俺しゃべってる…、月嶋としゃべれてる…！）

内心で一人テンション急上昇、舞い上がっていた。

なんせ想依とまともに会話出来るのも久しぶりなのに、同じテーブルで一緒に飯まで食えるとあっては舞い上がらざるを得ない。どれ程他愛たあいのない会話が続きこうと京志郎にとっては至福の時。ここが無人の空間だったならば「ウヒョー！！」とか叫んでしまいたいような勢いだ。

「…」

「…」

一方、色々と話題を提供していた想依はとうとう話すのを止め、自分の盆に乗った食事を片付けるのに取り掛かっていた。

京志郎が余りにも言葉を受け取るだけで返球してこないのだ、無理もない。

テーブルはついに沈黙ちんもく。

京志郎は赤面して俯き、内心ルンルンでフレンチカツサンドを食べる。

想依は少々気まずそうな顔をしつつ、淡々と目の前のパスタを口へと運ぶ。

カオスだ。

見ている方が辛くなるとはまさにこう言った状況を指すのだろうか。

（月嶋は何食べてんだろう？ いっぱい食べた方が良いつて言ったけど、月嶋もいっぱい食べんのかな？ 体重とか気にしないのタイプ？ いやいやそれはさすがにないか？ でもいつも見てる限りダイエットが必要な体でもなさそうだし。

まあ、部活で体動かすから少し多いくらいがちょうどいいのか？ かといって食べすぎたら『すぐ来る』とか姉貴が言ってたようなぼっぴん暴走夢想モード。もう、止まらない。

自分の股間辺りを見ていた、もとい俯むすぶいていた顔を少しずつ上げて視線を前方へと移すように試みる。

その速度は非常にゆっくり、決して悟さとられることのないように上目づかいで徐々に徐々に想依の視点移動を行ってゆく。

「あ、そういえば久遠くん、聞きたいことってなにー？」

「へ」

不意打ち。完全に油断していた。

想依の下唇したくちびるが視界に入りかけたところで急に声を掛けられ、超絶間抜け声おもてと超絶間抜け面おもてで面を上げてしまった。

しかし、京志郎がそのことに気付いて体裁ていさいを整えようとする前に想依は第二声を放つ。

「聞きたいこと、あるんでしょー？」

「えっ……き、聞きたいこと……？」

京志郎は想依の質問の意味が分からず思わずクエスチョンマークで返答してしまう。

「あれ……？久遠くんじゃなかったっけえ？おかしいなあ……」

「……？」

話が見えない。そりゃあ聞きたいことはいくらでもあるが（好きな食べ物何？とか、休みの日は何して過ごしてるの？とか、好きな人って……？とか）、そう言う意味ではなさそうだ。

話はまるで噛み合っていないが、月嶋の口ぶりから察するに、自分が何か「聞きたいことあるんだけど……」的なことを言った、もしくは言っただけと誰かに聞いた、という旨趣しじゆを含んだ発言だなど、探偵たんでいよろしく、京志郎は想依の意図するところを推理しようとする。

が、そもそも京志郎はそんなことを言った覚えはない。

覚えが無いだけで口走くちばしっていたという可能性があってもおかしくは

ないが、京志郎は「ない」と断言する。  
自分のチキンっぷりはよく知るところだ。残念ながら。  
「聞きたいことあるんだけど」なんてそんな大それたこと言えるはずもない。

互いが互いの言動に対しての疑問符を取り払うことができず話は滞る。

やがて右斜め上を向いて首をかしげていた想依は、

「あ、もしかして…クイズ？」

「…え？」

「わかったー！クイズなんだねー！なるほどー！問題が何でしょうって問題ってことだねー！」

「は…？」

いきなりなんだこの娘は。

自分をほったらかしで勝手にどんどん話を進めて行く想依に、京志郎は不覚にも頭が痛くなる思いた。

想依の不思議っぷりもよく知るところだったが、さすがにつらい。クイズって何だよとつい心の途中でツッコミをいれる。

「わかった！」と最高の閃き顔で手を打つ想依はきつと何も分かっていない、ということとは京志郎には手に取るように分かる。

とか思いつつも、想依のそんな無邪気な表情は、ささいな会話の食い違いなど忘れさせるほど京志郎を魅了するものなのだが。

(ていうか、マジでかわいい)

願うならずっと見つめていたいが、このまま想依にハンドルを握らせていたら話ほとんどもない所に終着してしまいそうなので、京志郎はとりあえず身に覚えがないことだけは伝えようと口を開く。

「あ、いや、俺は…」



「すとおおおおぶツー！」

バツ、と手の平をかざし想依は京志郎の言葉を遮る。

「大丈夫！ヒントなしでもきつと答えてみせるよー！」

自信満々でそう言い放ち、腕組みをしあごに手をあてて、考える人になってしまふ想依。

もうダメだった。

京志郎は想依の繰り広げる「月嶋ワールド」で完全に迷子になっていた。

大体、想依が何の話をしているかも覚束ない状態なのに、その上に想依おとくいの奇想天外な世界観まで上乘せされたら、それはもう異世界に迷い込む様なものなのだ。

「あ、わかったー！」

想依の頭上に電球がペカツと光るのが見えたような気がした。

しばらく有りもしない回答を夢想していた想依がはじき出した答えは、

「宿題のことじゃないー!？」

「…え？」

「宿題だよー！数学のー！」

「あ、数学の…そういえば…」

そういえばまだ手を付けてない。

数学の授業は6限なので、京志郎は昼食後に「いいんちよ」にでも教示を乞うつもりだったが、

「やっぱりー！確かあたしのクラスで出た宿題が次の日にそのまま7組でも出るんだよねえ。いいよ、教えなげー！」

と、想依は満面の笑みとピースサイン。かわいい。

「ってあたしもクラスのお利口さんメールで解き方教えてもらっただけどねー」

イタズラっ子のように片目を閉じ、小さな舌を出して「てへっ」と自分の頭を小突く。

そんな小悪魔的笑顔を見せられたらもう京志郎は腰砕けだ。

結局路頭に迷ってしまった会話の行き先など、どうでもよくなってしまう。

「高校に入ってからいきなり勉強難しくなったよねー。あ、あったあつたー、ほらー！」

と言って想依の見せる携帯電話の画面には、数式がところどころに混じった、問題の解法らしい文面がずらつと並んでいた。

どうやら想依のクラスの友人にも委員長並みのお人よしの秀才がいるようだ。

「じゃあこの解き方の書いたメールを転送してあげましょうー！」

想依は力チ力チと、瞳孔の開いた血走った目で両手に二ンジンを握った変なウサギのストラップのついた携帯をいじくる。

「あれ？あたし久遠くんのアドレス知らないやー。おかしいなあそれはそうだ。」

想依は予想外という感じで驚いているが、京志郎にはアドレスを聞かれた覚えも、交換した覚えもないので当然だろう。

何度も「交換しよう」言おうとはしたが。

脈絡なく連絡先を尋ねるなんて大業を全うできるはずもなく、今まですつと知らないままだ。

やがて、思案顔だった想依が口を開き、

「じゃ、この機会に交換しちゃいましょうー！」

「…え!？」

この短時間で何回目の「え？」だろうか。

しかし、今のは意表を突かれたことによる最大限の驚嘆と隠しきれないほんの少しの喜び成分が含まれていた。

この瞬間だけは、昨日の苦勞がただの徒勞ではなかったと思わずに  
はいられなかった。

「そんだけ？」

「それだけ。」

…。

「なんだよ」

感想も述べずに（別に感想を求めている訳ではないが）押し黙って、呆れているとも憐れんでいるとも、あるいはさすがに少し引いたとも取れる微妙な苦笑を浮かべる眼前の金髪野郎を「何か文句でも？」と言いたげな表情で軽く睨む京志郎。

「んにゃ、なんも」

逢阪は取り繕うように頬の筋肉を弛緩させていつものヘラヘラ顔にもどる。

京志郎も深くは追求せず再び目の前の数式との格闘に取り掛かる。

胃が昼食で満たされたところに5限・現国の授業での教師による教科書朗読子守歌のコンボを受けて、多くのクラスメイト達がすやすやと寢息を立てて机に突っ伏す今は、6時間目の休み時間。

京志郎はそんな睡魔のささやき攻撃には屈せず、国語教師が睡眠誘いマシーンと化した辺りから始めた6限開始時提出の課題プリントというボスと倒す作業を継続している。

「ま、一步前進ってとこやな。常人にとっては小さな一步かもしれないが、シローにとっては偉大な一步となるだろう！」

「うるせえよ。うまいこと言った風にして人をコケにすんな」

「あ、ちゃんとありがとうメールくらいはしろよ？ 礼節を怠る男に貰い手はないで」

「わーってるって、そんなくらい」

「んでそのメールをきつかけにしてくれからはガンガンメール送信  
送信や！折角アドレス交換したんやからな」

「でもガンガンって迷惑じゃないか？月嶋も部活とか忙しいだろう  
し」

「ちよつと相手が迷惑するくらいがええねんつて。んなら相手も  
この方どうしてこんなたたくさんのメールを下さるの…？もしかして  
私に気が…！」ってなんねん」

「いや、その人と月嶋とのキャラがかけ離れすぎなんだが…」

「んゝ確かにこんなに敏感な娘やったらこんなに苦労せんでもええ  
のになあ」

「そこじゃねえよ！いや確かにそうだけれども！」

京志郎の恋愛相談会はすぐに脱線。いつものやり取りに成る。

2人が話しているのは1時間半ほど前、昼休みの食堂での出来事に  
ついて。

京志郎は、5限目終了のお知らせが鳴り響いてからすぐうきつき顔  
いや、うずうず顔自分の席まで駆けよってきたパツキン系目男に「  
ご利益の程」二人きりになってからの自らの雄姿を雄弁に語  
っていたところだった。

ところが、京志郎が想依と共有した時間の一部始終を伝えるうちに、  
逢阪はみるみるいたたまれない気持ちと面持ちになっていった。

それもそのはず。

アドレス交換を終えた後の京志郎は、それ以前よりもさらに見るに  
堪えないフヌケ野郎だった。

想依ワールドが開闢され京志郎がその異次元の迷い人となって翻弄  
されているうちに、意味不明な成り行きで急遽、開催されることと  
なった連絡先交換会。

半端な労力で手にすることなど出来るはずがないと確信していた、

絶壁に生える「想依のアドレス」という花が、想依自身の力によって引き起こされた天変地異（ちい）の暴風を受け、風に乗って手元まで飛んできたのだ。  
それはまさに、神風。

もつと念入りに策を練って自然な流れを演出し、最大限の努力と備えを以つてして手に入れるつもりだった想依との繋がり。

それを微塵の労を払うことも無く「ゲットだぜ！」してしまうという圧倒的急展開に、京志郎は昨日に引き続き想依の前で半放心状態に陥ってしまったのだ。

それからの京志郎と想依のやり取りはこんな感じ。

「ええと、けーハイフンドウ…？しろ…？あはは、面白いアドレスだねー」

「ああ、うん」  
「よーし、登録かんりよー！久遠くんは登りよく出来たー？」（あ、囁んじやった）

「ああ、うん」  
「じゃ、メール転送しとくねー」  
「ああ、うん」

「何か分かんないとかあったらすぐメールしてねー。答えれる範囲で教えちゃいましょー！」

「ああ、うん」

……………。

会話終了。

二人きりになった当初から、オウム返しに喋るか「え？」しか言つて無かったが、それよりもさらに悪化した。最悪の状態をさらに下

回った。

これはキャッチボールですらない。想依が京志郎にボールを投げつけているだけだ。

沈黙が訪れてからすぐに、「鬼塚先輩」と想依が呼んでいたボーイツシユで背の高い女生徒が声を掛けていなければ、想依もキャラを忘れて発狂してしまっていたかもしれない。（ないとは思うが）鬼塚さんは昼休みに開かれるミーティング（おそらく女バレの催促をしに来たらしく、「早くしろ月嶋あ！遅れっぞ」「えっ、あたしまだご飯食べてるところなのに」といったやり取りの後、想依を引き連れて食堂を後にしていった。

想依は去り際に、

「じゃあまたねー久遠くーん。答えは後で送つとくからーっ」

と、わざとか気付いていないのか、人目もはばからずに京志郎に大きく手を振ってバイバイし、

（かわいかったなあ）

食堂利用者の注目を集めてミーティングへと向かった。

京志郎は心此処にあらすで「ああ、うん」と小さく手を振って、想依に礼の一つも返さずにご利益タイムが打ち止めとなったのだ。

逢阪は学校中に張り巡らされた情報網からいち早く、想依と京志郎の和気あいあいのお別れシーンだけを抽出した情報を耳に入れていたので、京志郎の上げた成果に期待していた。

のだが、蓋を開けてみれば京志郎は想依とまともに会話も交わすこともできず、拳げ句に「アドレス交換してたと思っただのに気付いたら月嶋が消えてた」などと世迷いごとを口にする始末。

上がりかけた株を自らの足で踏み潰す京志郎に逢阪も絶句するより仕方が無かった。

(シローは恋に臆病なんやなくて、恋愛に対する満足値が極端に低いんかもしれんなあ)  
と逢阪は推定する。

(でも、ほつとかれへんねんな。これが)  
実は、お節介は柄せっかいではながらい、と自己認識している逢阪も京志郎のこ  
とだけは気に掛けずに居られなかった。



「あ、そういえば」

逢阪あいさかと会話を続けながらも着実に進めていた課題プリントの残り体力があと一問となったところで、京志郎きょうしろうはふと思い出す。

「この学校にさ、髪の毛ながーい女の人っているか？たぶん一年生で朝日あさひの下、手が届きそうに届かない位置で踊る毛先を必死で追いかけていた光景がフラッシュバックする。

今こうして数式と遊ばなくてはいけなくなった、間接的な原因の一つ。

今朝の下駄箱女。もとい黒髪女。

生徒についての莫大ばくだいな情報を持っている逢阪ならあるいは、いや、以前一年生全員の大まかなプロフィールは把握はあくした、とか豪語たうごしていたいし、きつと知っているはずだと、半ばなか確信する。

彼女が例え上の学年でも有名な生徒 あれだけ綺麗きれいなんだ。有名にならない方がおかしいだろう。と思うけれど ことなら分かるに違いない。

高校に入学してこんな早くにデータバンク逢阪に頼る時が来るとは思わなかったが、有るものは利用しようという心持で、持ち腐れくさかけていた（わけでもないが、京志郎にとってはそれも同然だ）悪友の室に今朝出来た心の引っかかりを取り除く手助けを乞う。

「髪の毛長い女：？なんやねん、急に」

怪訝けげんそうな顔つてのはまさにこういうのを指すんだろうな、と十中八九が感じる様な表情で首を傾げ訝いぶかる逢阪。

その眉間みけんに寄せられた皺しわは、逢阪の頭の中に浮かんでいるのがただのクエスチョンマークではなく、不審ふしんを伴った疑問符ぎもんふであることを

感じさせた。

確かに急だったが、そんなに変に思うことか？と思いつつも、一応質問した理由を明かす。

「あー…。今朝さ、ちよつと早く学校に着いたからぶらつと散歩してたんだよ。そしたら中庭に女の人が倒れててさ。それで保健室には運んだんだけど、大丈夫だったのかなってちよつと気になってな」彼は嘘をつきました。

部分的に真実を織り交ぜながら、心ともなく虚偽を吐き出しました。と同時に、なんで嘘ついたんだろっ、と自問する。明確な答えなどきつとどこにもないだろうとうすうす勘付きながらも。

逢阪は納得した、とは言いつてもいいけれど「まあええわ」と妥協の言葉を発し、眉の間に寄った力を抜いて、

「他にその女の特徴は？」

京志郎の人探しに付き合ってくれようだ。

(特徴：、特徴か)

なので京志郎もあの謎の女生徒について想起する。

疾走し、風に揺られくっきりとした黒い髪。

朝日に照らされる、透けるような肌。細く白く長く伸びた両脚。

大きく澄んだ瞳。非常に端麗な容貌。

「ええと、すつげえ色白で、髪が真っ黒で腰くらいまである。んで、脚がはやい。身長は女子では高い方だと思っ」

背中を合わせて測った訳ではないので正確には分からないが、彼女の頭頂部がちょうど自分の目線の高さに相当するのではないかと、と身長175cm足らずの京志郎の推量。

もしそれが正解なら彼女は160cm代後半ということになる。

女の子で背の順に並べばうんと後ろの方に位置しそっだ。

バレーボール部所属でありながら、身長が微妙に低い想像が見たら羨ましがらるだろうな、などと架空の想像とコミュニケーション。

妄想の世界が領土を広げていく片隅で、京志郎は自分の発言について再度疑問を抱いていた。

黒髪少女の顔立ち　彼女が美人であることに、言及しなかった。あえて、というよりはやはり、無意識に。

どうしてだ。再び自問。

わからない。ってことはきっと深い意味なんて無いんだろうと、決めつけて気にしないことにする。

乱暴な決定に後悔しないことを祈りながら逢阪が記憶媒体から人物検索を終えるのを待つ。

「お前それ…、あいつのことちゃうんか？」

思案顔を満了させた糸目男はスツと左手を水平まで上げ、教室の左端、窓際後方の角に向けて人差し指を伸ばした。

（えっ、まさか…同じクラス！？）

予想外すぎる身近さで示された回答に驚きながらも、慌てて逢阪の指さす方へ体ごと振り返って視線を移す。

するとそこには、

「……………どこだ？」

誰もいない。

頭を左右に振って指示された場所の周辺を見回すが、居るのは現国の時間から眠りこけている短髪ツンツン頭の男子の屍だけだった。まさかこの惰眠を貪るイガグリ頭のことを指しているのだとしたらとんだご冗談だ。

ふざけるなど、出鱈目を抜かす悪友に抗議の言葉を浴びせんため、首を回して振り向こうとした瞬間、

「あつこや！よう見ても」

ガツ、と頭を両サイドから押さえられた。

逢阪は先ほど自分が指し示した方向に顔が向くように京志郎の頭部

を固定する。  
目じり付近の皮膚が引つ張られ、間抜けに垂れ下がった京志郎の眼に映ったのは、

「えっ」

いた。

人。女の子だ。

自堕落に脱勤勉を果たした生徒が席替えで手に入れた日には思わず小躍りしだすであろう、教室の一番隅の席。

近眼の者にとつては悪夢かもしれないが、多くの生徒にとつては授業という束縛された時間において最も自由を獲得できる特等席。

そんなみんながうらやむ窓側最後方、掃除用具入れの前の席に彼女はいた。

彼女は椅子に深く腰掛け、頬杖をついてぼんやりとガラスの向こうを眺めている。

「ん〜でも俺のデータとちょっとちゃうんやけどなあ。あの子別に背え高くないし」

京志郎の反応を見て正解に辿りついたと判断した逢阪が、不可思議そうに自分の記録と京志郎の記憶の齟齬を口にするが、京志郎はもつと訳が判らなくなっていた。

視線の先の彼女は漆黒の長髪を腰まで伸ばしており、窓の外の空だか海だかを見つめている若干の憂いを含んだ横顔はやはり桁外れに綺麗だった。

彼女の風采はこの2点については、全く見紛うこと無く朝に見たとおりだった。しかし、

「ちがっ…」

「あ、やっぱちゃうか。でも一年で腰くらいまである長い髪の子

なんか居らんで？」

「いや、あの子で間違いない、と思うけど、なんか、ちがう」  
「はあ？」

京志郎には、今の彼女には今朝とはまるで異なるところがあるように見えた。違和感と言ってもいいかもしれない。

京志郎は窓外を見つめる黒髪女の瞳を見つめる。

依然とこの上なく秀麗な双眸。

朝に見たときは確かにその大きな瞳に何か強い意志の様なものが宿っていたような気がする。

しかし、今の彼女にはそれが無い。今彼女の眼に映っているのは、おそらく風に流されて行くあてもなく彷徨い浮かぶ雲くらいだろう。あの娘も5時間目に仮眠を取っていたせいでまだ少し寝ぼけ眼なのかな、と思ったのは、彼女の二重瞼が大粒の黒目の上半分を覆ってしまったっているから。つまりは半目なのだ。

やる気無さげというか、退屈そうな印象を受ける。

教室で呆けている今の黒髪女には、6時間前指していた瞳の奥の凜とした光が伺えない。

そして、京志郎の主義には反しているのだが、朝の彼女が纏っていた空気やオーラといった目視出来ない類のものに、今の彼女とは明確な違いがあると感じた。

追っかけてっこをしている時の彼女には強い存在感があった。

彼女が駆け、黒色の髪が揺れるたびに零れ落ちるキラキラとした粒。それが汗ではないことは直感で分かった。

言葉にし難い、神妙な靈気に満ちた密度の濃い存在感が黒髪女にはあった。

朝は。今はない。

痛烈に焼き付いている彼女の雰囲気、今はまるで感じられない。されど、どこにでもいる普通の女の子です、って気配でもない。

今の彼女は極端に影が薄いように感じた。  
逢阪が助言してくれなければ、この狭い教室の中でさえ彼女を見つけたことが出来なかったのではないかと思う。  
それ程までに目の前の黒髪女の存在は希薄<sup>きはく</sup>だった。

外見と中身、ではなく外見とそのさ<sup>ら</sup>に外との誤差が激しい。  
見てくれは完全に今朝の美少女なのに、朝の彼女と今の彼女が同一人物であるということ<sup>を</sup>簡単に納得できない。

今朝出来た心の引っかかりを取り除くことはあっさりとは叶わなかった。

それどころかその引っかかりは形を変えて大きくなった。気がした。

「あいつのことについて教えてくれ」

と、クラスメイトなのに名前も不明瞭<sup>ふめいりょう</sup>な黒髪少女のデータの開示を逢阪に申請。

目を離すと見失ってしまいそう、と言う馬鹿げた杞憂<sup>きゆう</sup>が、事実として起こりそうなので長い黒髪を見つめたまま。

逢阪は気乗りしなさそうだったが、口を開き、

「黒咲楓歌<sup>くろさきふうか</sup>。出身校は山吹中<sup>やまぶき</sup>。」

閉じた。

「…それだけ？」

「そんだけ」

休憩時間の頭にしたりやり取りを、キャストを入れ替えて繰り返し返す2人。

「黒咲に関しては、どういうわけか詳しく知ってる奴も少なくてなあ。確定した事実があんまりないんや」

提示された情報量の少なさに京志郎が物申す前に、逢阪が理由を説明する。

「絶賛調査中つてことで、今日はお引き取り願います」

「おい、ちよまつ」

立ち去る逢阪を引き留めようと手を伸ばすと、6限開始の合図が校内に鳴り響いた。

逢阪の着席と同時に教室に入場してきたバーコード頭の数学教師が、クラスメイトにプリントの回収を通知するなか、京志郎は終礼後の予定を立てていた。

（会話してみないことには何も始まんねえもんな）

黒咲、楓歌。

なんとなく綺麗な名前だな、と結局最後まで解ききれなかったプリントを眺めながら、やっと判明した黒髪女の姓名を追想して思った。

(こういう目のことをなんて言うんだっけ)  
と考えながら、二つの黒い半円を見つつ苦笑い。

正解(かどうかは不明だが通俗的な言い方で)はジト目。  
無気力というイメージを抱かせるさつきまでの半目とは少し異なり、  
多少の警戒心と懷疑心を包含した眼差し。  
不審者か何かと思われるのではないだろうかと不安になる。そ  
こらじゆうに居る男子生徒と同じ身なりにも関わらず。

時は放課後。

カラスが鳴くよりも先に早々(はやばや)と帰宅する生徒たちが、  
波となって押し寄せる昇降口。

朝と同じ1年8組の下駄箱の前で、京志郎は黒咲楓歌と対峙し合っ  
ていた。

終礼が済んだ瞬間から見失わないように注意しながら、京志郎がわ  
ざわざ彼女の跡をつけてきたのは、6時間目に楓歌のことを考えて  
何気なく教室の斜め後ろに顔を向けたところを教師に指摘されて小  
恥ずかしい思いをしたことを理不尽に報復するためではない。

自分の授業を真面目に取り組んでいないと思ったのか、数学の田野  
は京志郎のその姿を見て憤慨し、数学が如何に人類の発展に貢献し  
て来たかということ、自分がどれ程高い学歴を持っているかという  
こと、こんな辺境の町の高校に赴任しなければならなかった事が心  
底不本意であったことを、数式の板書を中断して長々ネチネチと話  
した。

(やっぱり逢阪情報は正確さを極めているな…)



逢阪の言った通り、田野はなかなかのネバネバ粘着系教師だったよ  
うだ。

(しかも途中からはただの自慢話だったし)

「数学教師」ではなく「反面教師」の肩書きの方が適していると思  
いつつ、ああはなりたくないなあ

と、頭部が涼しげな中年の姿を思い浮かべる。

自分の町を販<sup>けな</sup>されたときは少しムツときたが、基本的に取るに足ら  
ないような内容だったので話その物は軽く受け流した。

田野の数学を真剣に聞いていた極<sup>ごく</sup>少数の生徒に、授業を中断させた  
ことに対する非難の視線を浴びせられたのは多少気にはなつたけれ  
ど。

話が逸れたので戻すと、

京志郎はここで件<sup>くだん</sup>の黒髪女・黒咲に今朝のことについての詫<sup>わ</sup>びを入  
れていたところだったのだ。

相変わらずの存在感のなさを誇っている楓歌は、一瞬でも目を離す  
とどこかに消え行ってしまうそうなので、(意味が有ったかのかは  
分からないが)教室からずっと瞬<sup>まばた</sup>きをせずに彼女の艶<sup>あで</sup>やかな漆黒<sup>しつこく</sup>の  
髪を追ってきた。

楓歌が靴を履き替えている隙に接近し、彼女の名字を声に出して呼  
び止めた。

楓歌は、振り向きざまの横顔にもまた相変わらずの美貌<sup>びぼう</sup>が顕<sup>けん</sup>在<sup>ざい</sup>して  
いた。半分とじた目もそのままだったが。

学校を出ようとすると周りの学生たちに理由不明<sup>き</sup>の奇異<sup>き</sup>な目を向けら  
れつつ、朝の狼藉<sup>ろうじやく</sup>、つまりは彼女を追いかけて回した<sup>ちん</sup>ことについて陳  
謝<sup>ちんせ</sup>し、そして、楓歌側の事情を聞き出そうと声帯を開きかけたこ  
ろで気が付いたのだ。

眠そうだった楓歌の大きな眼が、京志郎の話が進むに連れて、猜疑を纏う様になっていったことに。

「……」

楓歌は「なに言っただコイツ」と言わんばかりの、疑いと警戒の入り混じるじとーとした目で京志郎を見つめる。

何故か目の前の女の子は詫びを入れられている状況に合点がいつていない様子だ。

（忘れてるのか？ぶつ倒れた所為で記憶が吹っ飛んだとか…）可能性は無くもないような気がした。

京志郎は、人が記憶を喪失するメカニズムなど知らないが、朝っぱらからあのレベルの激しい運動をしたことは記憶を飛ばす要因に十分なりえると感じれた。

もしそうならば、京志郎の罪悪感の輪をかけて増大することになる。（それともマジで怒ってないのか？朝のこと）

だとしたら今朝見せた鬼の形相は一体何だったのだろうか。怒りに支配されていない人間があんな人を食い殺すような視線を送れるものなのか。

黒髪女の予想外の反応に面食らい、京志郎は二の句を継げることが出来ない。

「え、えーっと……」

しかし、硬直状態だった二人の空間に亀裂が入る。

朝と同じ。やはり凍結した二人の会話を溶かすのは、重圧に我慢が効かなくなった京志郎。

京志郎は、楓歌の探るような視線を掻い潜って、なんとか彼女を引き留めた本当の理由に辿りつく。そして、

「君は、俺の下駄箱に何をしていたの？」  
心に来た引っかかりをさらけ出した。

これ以上楓歌に怪しい輩だと思いこまれないように出来る限り柔和な口調で。

「…?」

すると、楓歌の表情に変化があった。

とても微妙な違いだったが、良く良く見ればその顔つきから読み取れる彼女の心中は、疑心から思案に移り変わっていた。

街中で見知らぬ人が声を掛けてきた時に、その人が何らかの詐欺グループの末端ではないかと警戒したが、話を聞いているうちに以前にどこかで言葉を交わした知人なのかと、考えを正すような。

その人の発言に自らの記憶と一致する部分を見つけ、疑いの場を自分の海馬へと移行するような。

そんな僅かな違いだった。

「なまえ」

風鈴。

短く、小さく放たれた音波。その第一印象。

「え?」

声の出し方を忘れていたと思えるほどに、ずっと押し黙っていた楓歌の唐突な発声。

不意を突かれて、京志郎はその小さな声を聞き落としてしまう。

「なまえ。あなたの」

少し高い、透き通った綺麗な声。

やがて楓歌は無表情な半目に戻っていた。

そして、目の前の「男A」に名を訊ねる。

シャープさの中に若干のあどけなさを有する不思議な声色は、最早

警戒心も懐疑心も含んでおらず、単純に目の前の男が誰かを訊いている様子だった。

「あ、ああ名前か。俺は久遠京志郎」

楓歌の言葉を理解し、名を告げる。

楓歌の希薄な存在が気を先走らせる所為で、京志郎は自己紹介もせずに話を始めてしまっていたことに気付く。

(ていうか、俺の名前知らなかったんだな…)

まだ入学して一カ月だし、それに教室では決して目立つポジションではない。

ということを実感していても、やっぱりクラスメイトに認識されていないと思うと、いささかの悲愁感が込み上げる。

かく言う京志郎も楓歌のことは知らなかったのだ、お互いさまと言えはそういうことになる。

(同じクラスだって言ったほうがいいのか)

などと、どうでもよいことを憂慮するが、口を開くかどうかを決断する前に、

「きて」

鳴る。風鈴が。再び。

「は…?」

「来て」

すでに靴を履き替えて校舎の外へと歩み出そうとする楓歌は、半身だけ振り返り流し目で京志郎に追隨を促す。

「あー…」

だが、京志郎は躊躇する。

押し寄せてきたのだ。直感が。

楓歌に付いて行くためにこの一步を踏み出せば、何か面倒くさいことが始まってしまうのではないか。そんな予感が、楓歌の小さな背中からひしひしと伝わる。

(第一、どこへ連れて行くこうってんだ)

美女に誘われたからと言って、ホイホイと尻軽にお供する程京志郎は節操が無い訳ではないし、馬鹿でもない。と言っよりは、臆病なのだ。

後悔するのが嫌なのだ。

「…?」

(そんな目で俺を見つめるんじゃないねえ…!)  
跡に続こうとしない京志郎に「どうしたの?」と目で訊ね、首をほんの少し傾げる楓歌。

その瞳には何の他意も思惑も裏も写っておらず、澄んでいる。というか、何も考えていないだけだが。

しかし京志郎にはその瞳に、言いようのない自責の念を感じてしまふ。

(「付いて来ないの?朝の事、忘れた訳じゃないでしょうね…」)  
と、楓歌の瞳が訴えている様に感じてしまふ。

「はあー…」

溜息。

妖精さんを殺すまいとなるべく吐かないようにしていたが、思わず出てしまった。

良心の呵責に耐えきれず、京志郎はその一步を踏み出す。

(元はと言えば自らの働いた狼藉ろうじやくが原因だ…。観念くわんねんしよう…) 乗りかかった船。

毒を食らわば皿まで。

この状況を正しく指し示すのに相応ふたわしいかは分からないが、そんなことわざが頭よを過る。

(南無なむざん三…っ！)

腹くを括くって楓歌の跡を追った。

浦島太郎という御伽噺がある。

子供たちにいじめられていた亀を助けた浦島は、その礼として亀に竜宮へ招待される。

そして浦島は竜宮城で乙姫にこの上ないもてなしを受け、極上の時を過ごす。

これは例え話だが、

もし浦島が「子供たちと一緒に亀を苛め、後に、その事を謝る為に再び亀のもとを訪れた」ならば、浦島は一体何処へ連れて行かれるのだろうか。

やはり竜宮へ連れられて、施しの代わりに拷問を受けるのだろうか。はたまた絶海の離島へ運ばれ、島流しに遭うのだろうか。

「...」

などと、心配性ここに極まれりな京志郎は、黙然と右斜め半歩前を歩く楓歌の横顔を、横目でチラッと覗き見る。

顔つきその物は無表情、と言うよりは無感情。

顔色は何を考えているのか全く見当もつかない、無を呈していた。

昔見た洋画に出てきた、人間そっくりの精巧なアンドロイドを思わせる、零感動の顔。

下手に言葉を発せでもすれば、その半分閉じた目から放たれる凍てつく視線に刺殺されるのではないかという幻想にさえ見舞われる。

(息が詰まるとはまさにこのことか...)

こんなにも人に口を開かせることを躊躇させる雰囲気があるのだろうか？と冷や汗を流す。

しかし、この底知れぬ気まずさも原因は京志郎の罪悪感にあった。  
（何故何も言わないんだ？これならいつそ罵詈雑言を含めながら、  
謝罪を要求された方がましだ…）  
念のために注釈しておくが京志郎は、美女からの言葉責めで悦楽を  
得ると言っような性癖は持ち合わせていない。  
どちらかと言えば『M』になるのだが、それはここでは別問題だ。

沈黙を守ったまま生殺し状態で放置されるよりかはいくらか楽だろ  
う、ということだ。

（俺が悪かった！だから、どこへ連れて行くのか教えてくれ！）

「…っ！」

頭一つ分下の美しい横顔に目で訴えかける。

「…。」

「…。」

京志郎は、彼の母の様な（自称）超能力者ではない。  
いくら睨んでも、念力もテレパシーも発動の兆しなど見せず、結局、  
京志郎の願いは叶わなかった。

否応なしに楓歌について行くと、

「あ」

見覚えのある通りに出た。

と言っても明確に記憶している道ではなく、なんとなく見たことがある  
ような風景だな…ぐらいな感じだった。既視感と言っやつだろ  
うか。

「？」

つい声を上げてしまった京志郎を楓歌が振り返って眺める。

楓歌は唇こそは上下くっついたままだが、顔は「どうかしたの？」  
と訊ねている。

それもまた微妙な表情筋の変化だったが京志郎にはちゃんと伝わっ



た。

こいつは顔で会話をするのが得意だな、とよくよく見ると少し間の抜けた表情の楓歌を見て思う。

「あ、いや、なんでもない。ちよつと知ってる道に出たと思ったからさ。この辺は普段ほとんど来ないのに」

「…そう」

さして興味も無さ気に短く答えて、楓歌はまた歩を進めようとする。

「あつ、ちよい、待ってくれ」

言って、その脚を引き留めた。やっと破れた沈黙に便乗して、

「俺たちは一体何処に向かっているんだ？」

膨らんでいた疑問を吐き出す。

「もしかして警察じゃ…」

最悪の場合の答えを恐る恐る口に出してみる。圧倒的に心配しすぎではあるが。

すると楓歌が答えた。

「いえ、」

…。

「へ？」

用件は済ませたとばかりに、また前に向き直ろうとする楓歌。

否定の語を初めに置いて「いいえ、です。」といった風に答えるのかと思いきや、楓歌の口はその二文字を音にして閉じられた。

「え、ちよつと待て。だから何処なんだ？」

虚を突かれたが、京志郎は慌てて訊ね直す。

楓歌は京志郎の方へ向き直り、やはり無表情で、

「だから、家。」  
いえ、イエ、家。  
「私の家。」

。。。。

「ああ、家、家ね。なんだ家かよ。てつきり痴漢扱いでもされて警察に突き出されるのかと思っただぜ。それが家かよ。家なら何の問題もねえな。だつていつ……いえええええつ!?!」

ノリツツコミ始めました。

こんなリアクションを取ってしまうのも逢阪とつるんできたことに起因するのだろう。

「家つて黒咲くろさきの!?!」

「そう。」「こくり。楓歌は首を縦に振り首肯しゅけん。」

「えっ、えええ……」

(マジかよ……)

「学校出る時に言った」

「言つてねえよ!初耳だ」

「?」

「な、なんだよその顔は」

キョトン、と言う擬音が聞こえて来そうな顔の楓歌。

本当に純真な眼で首を傾かしげる。

しばらく思考を巡めぐらせ、

「…忘れてたかも」

「んな大事なこと忘れんなよ……」

「うっかりミス」

「あのなあ、こんだけ人のこと不安にさせておいてうっかりで片付けるのはあんまりじゃね?」

「不安?」

「あ、いや、」

「なんで不安？」

「…行き先も告げられずにいきなり連れ回されたら不安にもなるだろう。自然の摂理だよ」

「そう」

詫びる様子も無く楓歌はまた前を向いて歩き出したので京志郎も後続く。

（出会って間もない　ってことはないか。クラスメイトだからなでも今日初めて会話した、まだ友達とも呼べない関係の男子を自宅に招待するって…。何考えてんだよ）

行き先を知って不安は排除できたももの、そのすぐ後ろには困惑が待ち構えていた。

京志郎の中の常識では、「家に呼ぶ」という行為はある程度の友好関係が築かれている人間同士でのみ起こりうるもの。

もしくは、「これからお友達になりましょう」という招待した側からの意思を表示するものだった。

前者はないとして、仮に楓歌が友達作りのターゲットに京志郎を選択したのだとしたら、それはそれで京志郎にとっても光栄なことであり、その意向に沿うのもやぶさかではなかったのだが。

（もしそうなら相当大胆だな。まだ名前しか知らないのに）  
などと思いつつも、京志郎は後者の可能性も本当に微小なものだと確信していた。

楓歌は自分から全く話しかけてこないし（まあ極度の口べたである可能性は否定できないが）、受け答えも簡素。

彼女が自分に興味を持っているとは到底考えられなかった。

楓歌の思惑が読めなかった。

（あ、言っとくけど、「女子の家に行くなんて小学生の頃以来だぜ」

とかそんなんじやねえからな！

中学の時にアリスン家に行ったことあるし！まあ…あん時は大人数  
だったけど…（

数年前の懐古と共にしようもない自尊心を誰に対してもなく呈示  
しつつ、先に行く楓歌の跡を追う。

なんとなく声を掛けることへの抵抗が薄れていたので、京志郎は道  
中にも楓歌の真意を問うたが、揺れる黒髪はしばらく間を置いて「  
上手く説明できない」、「来たら解ると思う」と振り返りもせず  
に宣った。

いっそ考えることを放棄して言われるが儘に流されてしまおうかと  
さえ思ったのは、楓歌の声が全く他意を含んでいないように聞こえ  
たからだった。

（あれ、この道…）

会話が止んでからしばらく歩くと、次はシツカリと記憶にリンクさ  
れた通りに立った。

山肌の傾斜に面する所々に轍掘れの出来たアスファルトロード。

ここを歩いたのはつい最近、というか答えを言ってしまうと昨日の  
こと。

京志郎は学校の下駄箱で感じた正体不明の嫌な予感的中してしま  
ったかも知れないと、

「あの、まさかだけどさ、黒咲ん家って…あそこか？」

怖々、反対側の歩道にある斜め前のそれ（・・）を指差す。

楓歌は京志郎の人差し指の延長線上に目をやってから、少し驚いた  
ように京志郎を見上げた。

瞼が半目から『4分の3』目くらいなるまでに持ち上げられている。

「そう」

肯定。

そして、その言葉は京志郎を深く後悔させた。

それ（・・・）の真向かいまで来て楓歌が脚を止めた。

「ここ。この上」

指差して目的地を見上げる楓歌。と同時に京志郎は落胆。

出来ることなら闇へと葬りたいと願っていた記憶が脳の奥から沸々と湧き上がり、忘れかけていた筋肉痛によって再び脚が軋む。

朱色であるという固定観念を覆して佇む石の、鳥居。

鬱蒼とした木々に頂きを隠された、石段。

悪友そののかされて訪れた、恋愛成就の神の社。  
その入り口の前に京志郎は再び立っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0329x/>

---

叶えぬ神に意味はなし

2011年12月26日23時46分発行